

192 河鍋暁斎と日本のことわざ（2023 年 9 月 7 日）

前回、1886 年に発行された[パリ・イリュストレの日本特集号](#)をご紹介します。この特集号には、いくつかの日本のことわざが掲載されたページもあります（写真右）。これは、河鍋暁斎の「狂斎百図」をフランシス・ステナケルが仏訳した「Cent proverbes japonais」（「日本のことわざ百選」の意味）の抜粋です。



河鍋暁斎（1831-1889）は、19 世紀に活躍した浮世絵師で日本画家です。暁斎に描けないものはないと言われたほど多彩な画家で、美人画、水墨画、幽霊画、戯画、風刺画など様々なジャンルの絵を描きました。「狂斎百図」は、1833 年から 1866 年にかけて刊行されたシリーズ作品で、風刺的な要素をもって妖怪や町人を描いた絵が人気を集めました。暁斎の作品は、当時日本を訪れた外国人の間でも評判となり、[エミール・ギメ](#)は[フェリックス・レガメ](#)を伴って日本に滞在していた間に暁斎を訪ね、親交を持ちました。「狂斎百図」には、ことわざとその意味を表現したコミカルな絵が描かれています。フランシス・ステナケルは、上田得之助とともに仏訳して、1885 年に「日本のことわざ百選」を発行しました。

ことわざが掲載されたページを拡大してみましょう。右の写真の下の方には、小さな文字で「Enfoncer des clous dans du Nuka.」（糠に釘）と書かれています。別のページでは、このことわざの意味を解説しています。糠は米の外皮部分で柔らかく、釘を打つことができません。これは、聞こうとしない人に忠告しても無駄だということを意味しています。この絵では、父親が息子の度重なる不始末を叱っています。しかし、息子は目をそらし、父親の言葉を見無視しています。悲しみに暮れる母親は、その光景を見て涙を流しています。家族の友人は父親をなだめようとしていますが、うまくいきません。一方、主人（父親）



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

の気が散っているのをよいことに、小僧が平気で舌を出しています。背景には、糠が入った箱に釘が打たれている掛け軸が描かれており、ことわざの意味を視覚的に表しています。同じ場面は「狂斎百図」（写真右）にも見られますが、色彩が明るく、この絵が「日本のことわざ百選」で使われたものであることがよくわかります。カジュアルで女性的な服装をした息子は、父親の言葉よりも社交に夢中になっているようで、糠に釘ということわざの意味を物語っています。



© Museum of Fine Arts, Boston
ボストン美術館蔵



次のことわざは「阿弥陀の光も金次第」です。これは、仏陀の加護はお布施の多寡によって決まるという意味です。阿弥陀様は、裕福な篤志家である夫婦の大金を満足げに受け取っています。阿弥陀様はお供えされた金を大切にされ、その見返りとして、寛

大なお布施をした人たちにご加護を与えられています。しかし、右側では、阿弥陀様が二人の貧しい老人を軽蔑して拒絶しています。彼らのささやかな贈り物は、阿弥陀様のご加護を受けるには十分ではありません。阿弥陀様の押し返すような手が、彼らを拒絶していることを表現しています。これは、平等であるはずの仏陀の恩恵が、富によって左右されるという意味を冷やかした言い回しとなっています。

ことわざを十分に理解するには、文化的背景を理解する必要があることが多くあります。しかし、暁斎のユーモラスで風刺の効いた絵は、その意味を容易に理解させてくれます。当時の読者が、このページを笑いながら読んだ姿が想像できるのではないのでしょうか。